

出会い ふれあい 助け合い

あべの

NO 85

ふれあい文庫主宰 岩田美津子氏

サロン・あべの六月の出会い

平成五年六月十九日(土)、

あいにくな梅雨空のなか、育徳
コミュニティセンター研修室に
おいて、サロン・あべのの六月
の出会いを開催した。

今月のパネラーは、昨年「見
えないお母さん絵本を読む」と
いう本を出版された岩田美津子
さんである。

そのタイトルにもあるように、
目が見えないというハンディを
お持ちの(男の子お二人の)お
母さんである。しかも、点訳絵
本の制作・貸し出しをしてもら
れる「ふれあい文庫」の代表で
あり、日本福祉放送(有線)で
は、自らプロデュースしパーソ
ンである。

ナリテイまでこなすという、絵
本の番組まで持っておられるの
である。

生立ち

先天性緑内障で、ほぼ生まれ
つき視力がなかった岩田さんは、
十四年間(小・中・高・専攻科
と)盲学校で寮生活を送られて
いる。その間、身の回りの事は
すべて、ご自分でできたため、
目が見えないことに不便を感じ
ることはなかったそうである。

しかし、卒業・就職という段階
になって、自分の希望と現実と
の間のギャップに、全盲のハン
ディを痛感されたそうである。
いったん病院に就職したものの、
対人関係の難しさなどから退職。
その後、大阪の鶴見区にある、

「こんな出会いがあったから…」

「私を育ててくれた人々」

視覚障害者の生活訓練センター
(日本ライトハウス)に入所。
再就職に向けて模索中に、同じ
センターの先輩と知り合い、結
婚。二児の母親となられたので
ある。

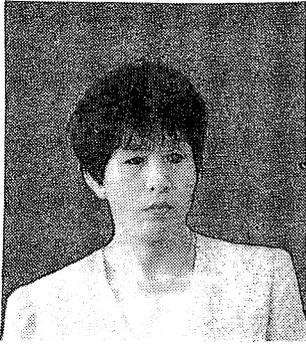
点訳絵本

母親として、子供に絵本を読
んでやりたいと思うのは当然で
あるが、目が見えないというハ
ンディから、それは容易なこと
ではなかった。

試行錯誤の末、まず、たどり
着いたのが、さわる絵本である。
元々が、視覚障害児のためのも
のであるから、岩田さん親子が
十分に楽しめるものであった。

しかし、子供が成長するにつ
れて、それでは物足りなくなり、
また、健常児として、市販さ
れている普通の絵本も、読んで
やりたいという思いから、点訳
絵本の制作がスタートした。

最初の点訳絵本は、透明で裏
に接着剤のついているシートを、



岩田美津子氏

絵の形に合わせて切り取り、そこに絵の名前などを点字で打って、ベースとなる絵本に、はり合わせたのである。もちろん文章も透明シートに点字を打ってはりつけたのである。この方法なら、見た目に違和感がなく、指でさわっても、絵の形がわかるのである。

ふれあい文庫

こうして自分の子供のために始めた点訳絵本づくりだったが、冊数が増えたこともあり、他の視覚障害者にも絵本を楽しんでもらおうと、「岩田文庫」として、貸し出しをすることになった。

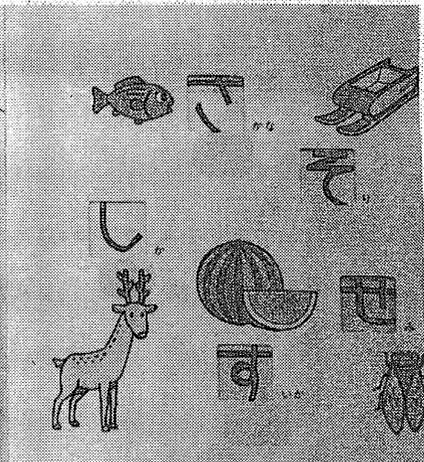
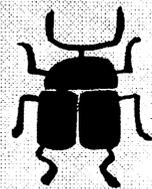
そして、この活動に、多くのボランティアが集まり、絵本も読者もどんどん増えて、発展的に「ふれあい文庫」となり、現在に至っている。その間には、点訳絵本の郵送料の無料化ということまで実現されている。

出会い

とても順調に発展してきたように見える、この文庫活動も、その都度、近所の主婦や、図書館員や、本屋さんなどの、出会いと協力があつたからこそ可能だったのである。対人関係で失敗したこともあるそうだが、それも教訓として、しっかりと、今に生かしておられる。

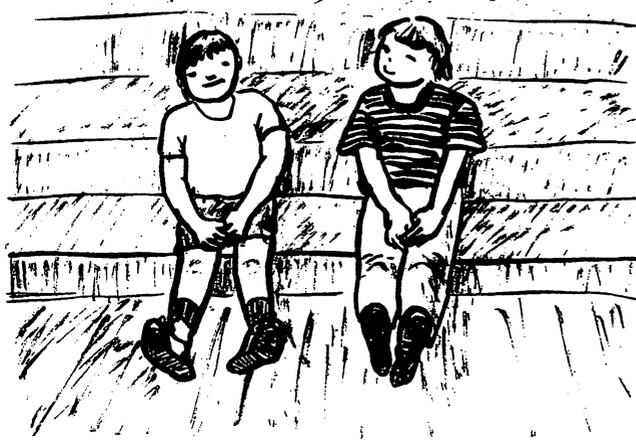
常に前向きに、目の前の問題を一つずつ、解決されてきた、その姿勢がとてもよく伝わる、お話であった。

- 参加者 || 二十名
- 司会 || 富田慶子
- まとめ || 上平幸雄



点字のシート (透明の塩化ビニール) を貼った絵本

出会いを助けるボランティア



「なんや、今月はエッセイ休みかいな」
 「そうや」
 「タネぎれかいな」
 「はよゆうたら、そんや」
 「そうやる思た」
 「なんでや」
 「先月のん、あれなんや。あれみたら、あ

あ、これは、もうあかんな、思たで」

「えらい、きびしいな」

「そらそやで・・・まあ、よろし。今月はどうすんねん」

「原田くんのが終ったやろ。あの後、書いてくれる人を、富田さんに頼まれてさがしとつたんやけど、なかなか見つからんかった。それで、その責任とつて、今回だけは、ぼくの定番のものといっしょにして長編の書くことにしたんや」

「そらええけど、なんか手え抜いとるとい感じやで」

「そない、いいないな」

「それで、テーマはなんや」

「△出会いを助けるボランティア▽や」

「なんのこつちや」

「つまりやな、人はみんな出会いを求めとるやろ」

「ロマンチックやなあ〜」

「いや、別にロマンチックな話とちごて、人間には仲間が必要やということや」

「なんで」

「おまはん、ひとりで、どないすんねん。いつつも一人でおつたら、せつないやろ」

「そら、せつないわ」

「しやけど、仲間ちゆうのも、なかなかつくるのは難しい」

「△しやけど▽? どの言葉や。まあええわ、どこが難しいねん」

「おまはんらみために、ポーツと、なんかついでに生きてるような人間にはわからんかもしれへんな!」

「なに怒つてんねん」

「これから親から自立しようと思て、障害をもつた人が新しい生活を新しいとこで始めるとしいな、新しい仲間がいるやろ」

「そうかもしれん」

「△そうかもしれん▽やないわい。ぜったい要るんじや」

「いや、ぼくの言うのはな、別に障害があるとか、ないとか、そういうこととは関係ないやろと言うことや。一人暮らしになつたお年寄りもそうやろし、新しく大阪に働きにきた若い人もそうやろしね」

「おう、わかつとるやないか」

「ひとり暮らしの人だけやないで。家族がおつても、家族だけでは、あかんこともある。地域の中で、だあれも知らんもんばかりのなかで暮らししてみ、家族がおつたかて、ほんま、息つまるで」

「しやけど、仲間がほしいと言うたかて、電車のなかで、誰か見つけて、△友達に

なつてくれ✓とは言えんやろ」

「ま、そら言えんわな」

「かといつて、家のなかに閉じこもっているだけ、家と職場を往復するだけでは、近所に仲間はできひんで」

「ま、そら、そうやろ」

「そやからな、サロンは、出会いの場をつくつていくんや」

「あ、なるほど、ほいでサロンなんやな」

「ほんでもつて、サロンでは出会いのお手伝いが必要なんやというのを、ぼくは言いたいわけや」

「なんや、よう、わからん」

「なにが」

「仲間づくりの場とか出会いの場にサロンがなる、ということはわかつた。そやけど出会いなんか、それぞれ自然にできるとちやうか。なんで手伝わなあかんのや」

「たとえば、おまはんなんか、新しい友達をつくりたいと思て、サロンにくるわな、そのとき、何がいちばん辛い？」

「何が、いうて、まあ、はじめは知らん人ばつかりやから、どないしたらええんか、わからんのが辛いな」

「そうやろ。そんなとき、気がるに声をかけてくれる人がおつたら、助かるやろ」

「ま、そうかもしれへん。けど、そいで、何、しやべつたらええんかもわからんかつたら、やつぱり、きつい」

「そやから、毎月、サロンでプログラムを組んどんやないか。その話をしたらええんや」

「あ、なるほどな」

「話題がちゃんと用意されとるわけや」

「つまり、仲間づくりという目的があつて、そのあとに話題の提供がくるわけやな」

「まあ、そない極端には言えんけども、それに近いもんがある。宴会を考えてみいな。ぎょうさん食べるもんや飲みもんがでるけど、食べたり飲んだりするために宴会やるとちやうやろ。もともとは楽しいに語りあうというのが、目的や。目のまえに、なんものうて、ほんなら、語りあいまひよ、いうても、なんか頼らないわな」

「気づまりやな」

「テーブルの上になんもなかつたら、それこそ、入社試験の面接みたいになるで。食べもんが目の前にあつたら、話題がとぎれたら、それ食べとつたらええんや。うまいなあ、とか、まずいと、なんでも言えるやんか」

「サロンで、いろいろ講師の先生を呼んでやつてるわな。ほなら、あれも酒の肴(さかな)みたいなもんなんか」

「まあ、そないゆうたら申し訳ないけど」

「申し訳ないけど、どないやねん」

「申し訳ないけど、そういうこつちや」

「なんやねん！」

「みんなが話しあうて、仲よくなるための話題提供ということやな」

「ほなら、あれか、○○先生の話をききました、いうて、先生の話が終つたら、

ほな、サイナラという人は・・・」

「サロンをぜんぜん誤解してはりますな」

「ははあ、なるほど」

「ただ、酒の肴(さかな)いうても、なんでもええというわけではないわな。このサロンの理念ちゆうのを表現したもんでないとな」

「えらい、難しいんやな」

「で、お手伝いの具体的方法は・・・」

「ああ、残念、もう時間切れや」

「なんやねん、それは」

「まあ、要するに、講師を呼んできて、話をさせて、それで終りというのではアカンというこつちや。そこでいくつの出会いがあつたかということやな。会全体が盛りあがつたということだけが大事やのうて、その場のなかで、ひとりひとりが誰かと出会うように手伝うのや」

「たとえば・・・」

「たとえばやね、出席している人のひとりひとりに注意することやな。話をしたいと思つていてもきつかけをつかめんで困つとんのか、もう少し様子をみたいと思とんのか、自分に注意を向けてほしいと思とんのか、そういうひとりひとりの心のうごきを察していくわけや。黙っている人には発言

の機会を与える、やなんて単純なやり方はあかんでえ。黙っているのは、話しようても話す勇気があらへんのか、それとも話しようないのか、それを見分けなあかんわな」

「えらい難しいな」

「それと、ひとりひとり毎回の變化に氣をつけなあかんわ。人間関係というのは、生き物なんやで。近こうなったり遠うなったり、いつつも動いとるんや。その動きをつかまえんとな。」

そやから、サロンのいちばん大切な部分はな、プログラムの始まる前と終ったあと、自由な空白の時間にあるんや。そこでいくつのお会いの手助けをできるか、それこそ、サロン・ボランティアの短い時間の真剣勝負やでえ」

「ああ、ほんで、入会いを助けるボランティアVちゆうわけやね」

(知)



作る・つくる・創る

「あなた作るひと、わたし食べるひと」という言葉(逆だったかしら)が論議を呼んだことがあります。何

●河合恵子

作る

つくる

創る

1

かをつくりだすことにおいて男や女、或は年が若いとか老いているというのと、また障害者が健常者かといったことより、なんといつてもつくるひとの豊かな感受性と何かを表現しようとする技術と情熱は、見るひと、聞くひと、読むひと、食べるひとに伝わりますね。

さてこの六月ちよつと素敵な染色展を見せていただきました。一疊くらい大きな布に鳥をモチーフに描かれたさまざまな作品。インドやインドネシ

アの更紗のようですが、荒々しい線と落ち着いた色、そして蠟燭特有の表現が大胆でしかも繊細な作風を作りあげていて、とても魅力的でした。また会場の人近くに作者二才の鳥の絵が掛けられていて、こうした作品を残しておかれたご両親っていいなあと感じたものです。ところでこの作家は現在、初芝高校講師でまた大阪芸術大学で染織を学び続けている石田元さん。われらがサロン誌編集長のご子息。心齋橋のヤマハのお店のウインドーディスプレイの制作もされており、こちらは明るく親しみやすいタピストリーの作品。これから、どのような作品を創りだされるのか、わくわくします。



の下院議員に書きました。もしも、痛みやけいれんが起きてもコントロールのもとで私はもっと機能することができるのです。彼らはレントゲン写真(走査写真?)を撮って骨折した肋骨を見つけました。

そして現在、背骨を動かさないようにするため起き上るときはコルセットをつけなければなりません。それはかさばって、ぎこちないのですが、少しは助けになります。

また、右足にも打撲から関節が抜けないように足のコルセットをつけます。

私は、1987年に薬物治療の失敗を受けました。私は、あなたのグループの人たちに手紙を書くことや情報交換に関心を持っています。痛みに対してどんな治療の違いがあるのか、またそれを受けたあとの結果はどうなのかを知りたいと思います。

私の叔父は日本で医者をしています。私は日本語を書けません。そして、彼は私の

it is experimental. So I write to my Congress man to protest I could be alot more functional if I could get the pain and spasms under control. They did a bone scan and found a fracture of rib and never did rule out a back fracture so now when I am up I must wear a body brace. It is bulky & awkward but it does help some. I also wear a leg brace on my rt leg to correct foot drop from a stroke I had in 1987 from a medication error.

I would be interested in writing and exchanging information with people in your group. I'm interested in what other cultures may do differently for pain and what kind of results that they may have.

My uncle is a Dr in

手紙を理解できませんでした。私が病気であることは理解して、それは彼を心配させました。私の母(彼女は日本人)が今日ここへ来て、私たち2人で彼に何とか手紙を書けるかも知れません。

あなたはニュースレターを出しておられるのですか。ミーティングでは何をなさるのですか。あなた方のミーティングでよい反響はなかったのでしょうか。多くの日本人は冷静でまさにタイプA(まさに私もそうです!)であることを知っています。それを(私の望んでいることが)受け入れられなければ私たち(私と母)はくじけてしまうか傷ついてしまうでしょう。

いずれ、私は障害者になることがわかっているのです。そのことは私を落胆させるでしょう。

私は、あなたとあなたのグループからの返事を待っています。

パティ・トラッキー

Japan, he specializes in holistic medicine. I cannot write Japanese and he did not understand my letter, he understood I was ill and it worries him. My mother (she is Japanese) will be here today maybe between the two of us we can somehow write him.

Do you have a news letter what do you do during the meetings? Have you had good response to your meetings? I realize a lot of Japanese are stoic and very type A (I am one!) So it is hard to admit we can't keep up or we hurt. It's taken me years to finally realize I am disabled.

I look forward to hearing from you and your group

Patti Truckey

アメリカからの手紙

親愛なる慶子さんへ

すぐにお手紙書かなかったことを謝ります。

私は、病気だったのです。痛みとけいれんの発作を押えるため、神経ブロック(神経を麻酔で遮断する)を受けるため2週間半入院していました。かぎ形に曲がったところに薬物治療をコントロールするポンプのカテーテルを差し込んで置くために硬膜外ブロックを3回受けました。

彼ら(医者)は背中の上の方にも、もう一度神経ブロックを行いました。彼らは、私が交換神経筋ジストロフィーと繊維質リユーマチを患っているために決定したのです。不幸にも、その神経ブロックが最後ではなかったのです。彼らは、私の腕にも神経ブロックをただけでなく、首にも針を突き刺したのです。そのため手が使いにくくなりました。そもそもは、後頭部と首の

Dear Keiko:

April 14, 93

I apologize for not writing you sooner. I have been sick. I was in the hospital in February for 2 1/2 weeks having nerve blocks done to help with the pain and muscle spasms. I had 3 epidural blocks when they leave the catheter in hooked to a pump that I can control for medication. They did one (a block) in my upper back too. They determined I do have Reflex Sympathetic Dystrophy and Fibromyalgia. The blocks did not last on me unfortunately. They wanted to do a nerve block for my arms but they stick the needle in your neck and I could not handle that.

I did have trigger point

下と両肩の注射が最初だったのです。それらは、助けになりました。2回連続で、したのが病状を軽くしていました。日本では慢性の痛みに対してどんな種類の治療がなされるのですか。私は、指圧、針療法、カイロプラクティック、リラクステクニクスなどほとんどすべてのものを10回単位で受けました。

その後、復活祭の頃、親類を訪ねたり、2回復活祭に出かけたりしてうちに帰った時、倒れたのです。医者がやってきて、私の体にモルヒネ(麻酔薬)のポンプをつけました。それは全く痛みを取り去ることはできず、もっと痛くなりました。

私は、モルヒネの移植をしてほしいのですが、メディケア(医療保険制度)もブルークロスもそれを認可していないのです。— 彼らは、それを実験的なものだと言うのです。それで私は、抗議の手紙を私の方

injections in the back of my head and down my neck and each shoulder. They do help. I've had two series of them with good relief. What kind of treatments are done in Japan for chronic pain. I have tried shiatsu, acupuncture, chiropactors. Relaxation techniques, astens unit almost every thing. Then I fell around Easter while visiting relatives and went to the ER twice and when I came home the Dr admitted me and put me on a morphine pump. It didn't take all the pain away but a lot of it. I would like to have a morphine implant but medicare nor blue cross will approve it - they say



はあとがはろー!

ボランティア・グループの仲間入り

富田 慶子

初めて参加した昭和六一年の「あべのカ
ーニバル」も無事におわり、バザーの店を
出したサロンは三九八三〇円の収益金を得
ることが出来ました。これで今までの運営
費の補填が出来て、まずはホッとしました。

この年の八月末にあべのボランティア・
ビューローのコーディネーター交代があり
ました。そこで、サロン関係の有志が集り、
東京の大学へ赴任される岡氏の送別会と、
新任の前田博子さんを迎える歓迎会を兼ね
て、あべのセンタービルの九階コンコルド

でささやかな「歓送迎会」の場を持ちまし
た。

さて、昭和六一年秋の出会いには、九月二
〇日(土)「コミュニティケアとボランテ
ィア」、十月十八日(土)「障害者が語る
地域生活」がテーマでした。

内容としましては、参加された障害者と
健常者との、障害者が地域で自立生活を送
る上での様々なハンディについて話し合っ
た。また、初対面の人達が多く、障害に
ついてはお互いに解り合えないところが多
くありました。その分、お互いに率直な質
問が出来たのではないかと思います。

特に聴覚障害者の社会的ハンディ(外見
は健常者で、誤解を受けやすいということ
)は、視力障害者や肢体障害者には思いも
かけないことでした。障害について重い軽
いは、短絡に言えないと思えました。

その当事者にとって障害がどのように関
わっているのか、それをどのように受け止
めていくのかで、各々の障害に対する姿勢
が伺えました。その中で、障害者には情報
が必要と情報紙を発行されていた春山満氏
の熱い話が印象的でした。また、石田氏
が「出会い・ふれあい・助け合いをモット

ーに参加している」とざらりと言われた言
葉が心に残りました。それで、十一月の案
内チラシには「△サロン・あべの▽三つの
愛 出会い・ふれあい・助け合い」と使わ
せてもらっています。この言葉は、その後
サロン活動の基本テーマにもなり、サロ
ンのキャッチフレーズにもなりました。

サロン活動は、色々な人達の参加で順調
に進んでいきましたが、ボランティアグル
ープの活動としては知名度が低く、何とかサ
ロンのことを多くの方々に知って欲しいと
希っていましたところ、あべのボランティ
ア・ビューロー主催で第一回の阿倍野区ボ
ランティア交流会が開催されることになり
ました。それは、第三土曜日の十一月十五
日、サロンの出会いの日でもありました。

阿倍野区内のボランティアグループの交流
会に△サロン・あべの▽はボランティアグ
ループとして参加して良いのかという不安
もありました。今まで介助や介護を受ける
側であった障害者が、健常者と共に活動し
ているとは言え、ボランティアとして参加
する事を一般のボランティアがどのように
受け止められるか、とても不安でした。

サロン活動を説明するにも、具体例は少

なく「お互いに出会う」事がサロンの最初の目的という、掴みどころのない抽象的な言葉でしか表現出来ないもどかしさを持っています。

交流会は、各ボランティアグループの連がばらばらにテーブル毎に集り、お互いのボランティア活動を紹介したり、意見交換をしていくという内容でした。

その時集ったグループは阿倍野区ボランティア連絡協議会(大阪市立大学医学部付属病院・身障者スポーツセンター・友愛・朗読・みどり教室・洋裁・茶道・身障者団体等グループ)と、丸山地区社協、阪南地区社協、ビュローグループでした。

各テーブルに着いたサロンの人達が、そこでサロン活動をどのように伝えて下さるかも心配でした。あれこれ考えているとサロン・あべのが押し潰されていくような変な気持ちになってきたりしました。が、これらの不安は全て杞憂に終わりました。

ボランティア交流会の前日、ビュローから一通の通知を受取りました。それは、夏に大阪市社会協議会に申請していたボランティア活動振興基金の助成金交付決定の通知書でした。



「さろん亭」へエールをおくる

△サロン・あべのV紙、毎月あり
がとうございます。

「はあとが、はろー!」第五、テ
ントの苦勞を読ませていただき、大
変御苦勞がおりだった事を知り、
わずかばかりの品物を提供させてい
ただいてただけの身勝手な、申し訳
ないような気持ちです。

今年もあべのカーニバルに「さろ
ん亭」をオープンされます由、御準
備は大変だと思いますが、お身体に
気をつけてより多くの出会いと思
い出を作して下さい。

陰ながら応援させていただきます。
そろそろ梅雨も上る頃と思います
が、くれぐれも御身大切にして下さ
い。
N・N

△サロン・あべのVの活動がボランティア活動として認められたのでした。

これはボランティアグループとしての最高のお墨付きでした。本当に嬉しく思いました。

十五日の阿倍野区ボランティア交流会に

は、各テーブルにサロンの人達が加わり、障害者が地域で生活していくには、まずお互いに知りあうのが大切と、「出会い」の一步を体験しました。

何が出来るかではなく、ありのままの障害者の姿と生活を知ってもらおう中から、支

えあう地域社会のありかたが見えてくるのだと思えました。

△サロン・あべのV運営委員会が名実ともにボランティアグループとして、紹介されたことは言うまでもありませんでした。

ナンペイの

ひとつこと&ふたこと

ナンペイの「ジュウデン宣言」

「ハワイ珍道中」にはじまり、この「ひとつこと&ふたこと」コーナーも今回で30回ということになりました。

その間には、アホなことやらいろんなボヤキの様なこと。そしてプルトップやアルミ缶集めに協力して下さったことへの感謝の気持ち、などなど色々なことを書かせていただきました。

勝手気儘に書かせてもらっているのに、「がんばって書いてください、楽しみに読

んでいますよ」と声を掛けてくださる方もおられ、そういったことも大変な励みになって三年以上も続けて書かせて頂くことが出来たと思います。

ただ、ここへ来て「筆不精の虫の大暴れ」と言うか、「話のネタ不足」の苦しみに陥ってしまい、(ほんとうは己の力不足なのです。)期限を大幅に過ぎての入稿や、それでもどうしても間に合わず「休載」と言うことにしてもらったりの状況でした。

そんな私を見かねての編集長からの、

「一度、充電期間を置いてみては?」
というやさしいひとつこと。

「ソレ、イタダキ!」

と言った具合に、思い切ってしばらくのあいだこのコーナーを閉じることにしました。もちろん、「でたがり」のナンペイのことですから時折ヒョイヒョイと顔を出すこともあると思います。そしてまた、エネルギーをたっぷり蓄えたときにはこのコーナーを再開して勝手気儘に「ひとつこと&ふたこと」ならぬ「みこと&よこと」(あんまり語呂はよくないですネ)を書かせていただければ、と思っています。そのときにはまた宜しくお願いいたします。
みなさん、永い間ありがとうございました。

南光龍平

美智子のこんな話



岸田 美智子

《障害者の「自立」にむけ、

始動・開始だ〜ッ!》

九三年度の全体合宿では、外出サービースとウイル作業所の組織の統一という、大きな課題について討議されました。

また、その討議内容の一つとして、会の名称も変更して、新たな気持ちで活動を、展開していこうということになりました。

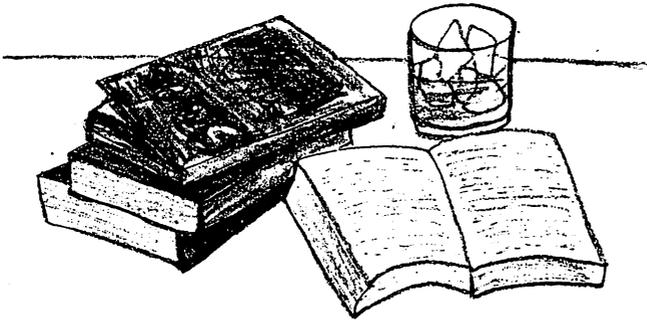
そして、施設・地域の障害者が当り前の生活を作り出し、それらを支える仲間つながりを広げていこうといった、みんなの気持ちや願いを込めた名称として、『ライフ・ネットワーク』と決定しました。

この新しい名称については、九三年六月より実施していきます。

また、会の名称が変わったからと言って、活動や取り組みの内容は変わりません。

従来通りの、施設障害者の外出支援活動を中心にして、施設問題の取り組みや、障害者の自立や生活作りなどについて、しっかりとみんなと一緒に活動を展開していきます。

今年度もどうぞよろしく願います。



井 感謝します井
カンパ・切手・バザー用の品・冊子等、
ありがとうございます。
お礼を申し上げます。

六月のカンパ

金七九、五〇〇円

- 旭 純子、大塚一枝、岡 知史、
- 奥田久子、金子花江、小西千代子、
- 斉藤孝文、崎本ヒサエ、竹村定子、
- 田中康弘、富田万里子、東谷和代、
- 一松孝博、匿名三名。(敬称略)

∞ サロン・あべの紙の

朗読テープが出来ました ∞

山本敏子さんのご協力で、サロン・あべの紙八四号の録音テープが出来ました。

バックナンバーは三九号から、八四号の分があります。五〇号は五周年記念紙になっており、九〇分と六〇分の二本のテープに収録されています。

サロン紙朗読テープをご希望の方には、ダビングをしますので、富田までお申し出下さい。(☎〇六六九一一〇二八)

惜敗
対エスカルゴ第五回定期大会

土井俊次

六月十三日の「AMFCエスカルゴ対大阪ローリングタートル」第五回定期大会に向け、五月のサロンでは熱いエールを贈っていたいただき、選手も意気込んでいたのですが、大変残念な結果になってしまいました。試合は、前後半、そして延長戦と、○対○の緊迫したムードの中、始終名古屋チームが優勢にたっていたことは事実だと思います。観戦していた私達も、昨年より一段と力をつけた名古屋チームの攻撃に圧倒される思いさえありました。

大阪チームにもチャンスがなかった訳ではありませんが、後もう一步の詰めがやゝ弱かったと思います。でも、選手は、調子が上りきらないまゝにも固い守りを見せ、一点も許さなかったのは、日頃の練習の成果を発揮し、良く頑張ってくれた結果だと思います。

おもろい 姉ちゃん

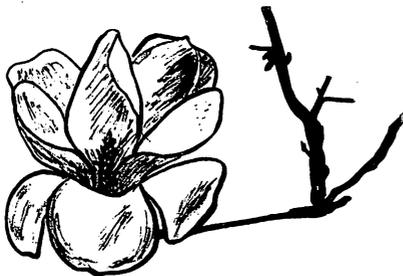
田淵 美登利

ちょっと 反省

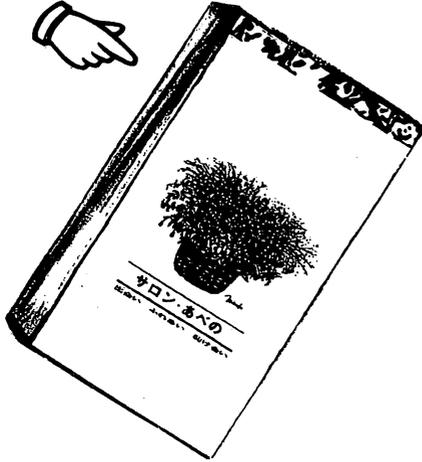
最近、とても疲れている気がする。こんごう寮に来て一年と七ヵ月がすぎて、最初は本当に「寮生さんのおもちゃ」でいいから、楽しい日々を一緒にすごしたいと思っていた。

「ブタ」だと言って、まだ遊んでくれる寮生さんがいる。彼達、彼女達に見捨てられないうちに、もう一度「おもろい姉ちゃん」に戻ろうと思う。今月は、ちょっと反省しました。

それが、日々の寮で定められたプログラム、他職員との関わりからくる「指導員」としての変な自覚に流されて、いつのまにか「おもろい姉ちゃん」が「ろうるさい姉ちゃん」に変わりつつある。ろうるさい姉ちゃんは、私の性に合わないから疲れてくる。ふと、周りを見れば「田淵のおばはん」だ。



好評



- 草花の密やかな囁きとやさしさが花籠いっぱい描かれた表紙が好評。
- システム手帳のスペア用紙にも使用出来る大きさが好評。
- ペンすべりのよい高級紙が好評。

出会いの楽しさ、一言の言葉の喜びを伝えてくれる《メモ帳》。「サロンの《メモ帳》」と言ってお求めください。

○1冊(100枚綴)・・・¥150.

「ふれ愛空の旅」(上平幸雄)は、今月休ませさせていただきます。次回はいよいよ最終回となりますが、どうぞお楽しみに。

そして、熱戦の結果PK戦にて二対三で破れてしまいました。選手はしきりと反省し、悔しがっていますが、この悔しさを次の秋の大会への励みとして、また皆で練習を重ね、頑張っていきたいと思えます。

試合後の交流会では、「遠征のときのへ移動Vの苦勞は両チーム共通の悩み…」と大いに盛り上がり、負けた悔しさも忘れ、爽やかな気持ちになって帰ってきました。

秋の大阪大会には、ぜひサロンの皆さま応援にきてください。

(大阪ローリングタートル代表)

お知らせ

8月の出会い

日時 8月8日(日)午後1時～

内容 『さろん亭』

「あべのカーニバル」なんでも市通りに開店(販売は3時から)

場所 市立工芸高校グラウンド

[阿倍野区役所の東隣り]

その他 なんでも市以外にも色々な催しが盛りだくさんです。(雨天中止)

- *お願い
- ・物品を寄贈して下さる方。
 - ・準備を手伝って下さる方。
 - ・販売を手伝って下さる方。
 - ・買いに来て下さる方。
- ご協力お願いします。

問い合わせ先

☎06-691-1028 (富田慶子)

編集後記

お待ちどうさま、いよいよ河合恵子さんの登場です。

「作る つくる 創る」をご期待ください。

語呂の悪い「みこと&よこと」での再会を約して、ナンペイの「ひとこと&たこと」は終わります。30回の永きにわたって執筆の南光龍平さん、番外編の仁子さん、ありがとうございました。

本紙は<100号>まであと15(石)

8月8日(日)、あべのカーニバルに
「さろん亭」がオープンします。



◎お問い合わせ

石田 律	阿倍野区昭和町3-11-13	☎622-2018
井上憲一(セルフ社)	々 西田辺町2-2-10-101	☎691-2365
辻本輝子	々 阪南町1-40-5	☎621-2241
富田慶子	々 阪南町6-3-26	☎691-1028
中原友喜	々 丸山通2-10-6	☎652-1208
山村貴司	東住吉区南田辺5-1-18	☎691-9071

品物をご連絡くだされば取りにおうかがいします。こわれるものでなければ送料着払いでお送りくださっても結構です。厚かましいことですが、古本・古着などご使用になったもの、および、なまものは遠慮させていただきます。

編集人；サロン・あべの運営委員会・<サロン・あべの>NO.85['93.7.17発行] 定価¥100。
 代 表；上平幸雄〒545 大阪市阿倍野区阪南町2-19-2-303. 電話06-621-4365
 連絡先；富田慶子〒545 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26. 電話06-691-1028
 表 題；斉藤孝文・筆
 印 刷；セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町2-2-10-101. TEL.06-691-2365.